

徳を高めない、とパウロは指摘している。預言は、通常、語られれば理解できるが、「異言」は語られても理解できないことを示唆している、と思われる⁸⁰。そして、外部の未信者、普通の人には、つまりさとなりかねないこともパウロは指摘している。また、パウロは「解き明かし」なしの「異言」よりも預言の方がまさっている、と言う。即ち、「異言」とは、「知性 (*sophia*)」と無関係に「霊 (*pneuma*)」のなせるわざと結論できる(一四：一四)。とはいえ、「異言」を語る者は、自分自身で語る、語らないの制御ができるらしい。しかし、その反面、「異言」を語り始めると、キリストを呪ってしまうほどに(コリント第一二二：三)、「異言」を語る者は、一種の陶酔状態に陥るらしい(勿論、キリストを呪ってしまうのは、真の「異言」ではない、とパウロは指摘している)。パウロは、時と場所と方法をわきまえて「異言」を語るように教えている。また、「異言」を「解き明かす」ことも御霊の賜物の一つであって、神から与えられる必要がある(一二：一〇)。

以上、コリント教会での「異言」についてまとめてみると、次のようになる。

(一)「異言」は御霊の賜物の一つであるが、最高の賜物とは言えない。
(二)しかし、「異言」は聞いただけでは理解できない。従って、「解き明かし」の賜物なしでは、教会の徳は高められない。
(三)「異言」は未信者、普通の人にはつまずき(「しるし」となり、教会の礼拝の秩序を乱しかねない)。

(四)本当の「異言」と偽の「異言」との区別は、イエスを呪うか、主と告白するかが基準となる。

三、使徒の働きとコリント教会との比較

以上、簡単ではあるが、使徒の働きの「他国のことば」とコリント教会での「異言」を見てきた。すでに述べたように、使徒の働きだけに限るならば、ルカは、二章の聖霊降臨の際の弟子達が語った「他国のことば」と、一〇章、一九章の「異言」とを同一視していた、と思われる。しかし、全体的に見て、使徒の働きの「異言」とコリント教会での「異言」との相違の方が印象に残ってきたように思う。使徒の働きの「異言」は、教会の発展における特定の局面に起こった、一回限りのものであった。それに対して、コリント教会の「異言」は賜物であって、繰り返し用いることができたらしい。また、使徒の働き、とりわけ聖霊降臨の際の「異言」は、理解できることに意義があったが、コリント教会での「異言」は、「解き明かし」なしでは、理解できないのが重要な特徴であり、未信者にとって「しるし」となる。

しかし、両者の類似点も無視してはならない⁸¹。先ず、どちらも聖霊によるものである。そして、どちらの場合でも、*ψαλμοι* という名詞が用いられており、しかも構文的にも、ほとんど同じく *κακεῖν (ἐπεφάνη) ψαλμοὺς/ψαλμοὶ* となっている⁸²。また、パウロは、コリント人への手紙第一一四章で、「異言」と預言とを類似した賜物として扱っている。ただ、預言は誰にでも意味がわかるが、「異言」は「解き明かし」の賜物なしには誰にもわからない、という点が異なる。他方、使徒の働き二章で、ペテロは聖霊降臨、そして弟子達が「他国のことば」で語り始めたことを、ヨエルが預言したことに他ならない、と述べている(二：一六)。ところが、ヨエル書にも、ペテロのヨエル書引用文にも、「異言」そのものへの言及は全くない。あるのは、預言への言及であり、しかも、ペテロの引用ではヨエル書原文よりも預言を強調している⁸³。従って、ペテロも(そしてルカも)、「異言」が預言と類似してい

ると理解していたに違いない。

また、同様に、パウロは「異言」が何らかの形で外国のことばと似ていると考えていた節がある。コリント人への手紙第一一四：二一で、パウロはイザヤ書二八：一一、一二bを引用している。当然、イザヤ書には、「異言」への言及はなく、「外国のことば」に言及されているだけである⁷⁰。そして、パウロは、この引用を根拠にして、二二節以降で「異言」の意味について論じている⁷¹。勿論、これはパウロが、*γλώσσα* および、その派生語（ヘブル語のラシオンも含め）の意味の二重性（更には三重性）を巧みに用いて、イザヤ書の「外国のことば（*ἑτερογλώσσος*）」に「異言（*γλώσσα/γλώσσα*）」を読み込んだのかもしれない。あるいは、一一節のように、外国語と「異言」の両方に共通する不可解さへの注目している、と理解するべきなのであろうか。

更に、新改訳で「解き明かす」と訳されている *dequyueuo* には、「翻訳する」という意味もある⁷²。また、同根語 *dequyueuo* は、「通常」「翻訳する」を意味する⁷³。ところが、パウロは、「解き明かす者（*dequyueuētis*）」が、その賜物を習得できる可能性を認めていない（否定もしていない）。ただ、「解き明かし」の賜物が与えられるように、祈るように勧めている（一四：一三）。

最後に、ルカとパウロとが記す外部者の反応が類似している。ペンテコステの時、『甘いぶどう酒に酔っているのだ』（*γλυκῶν μεθεστραμένον εἶδος*）』と弟子達を嘲る者がいた（使徒二：一二）。他方、パウロは、「初心の者とか信者でない者とかが（*ἰδιῶται ἢ ἀπιστοί*）」教会全体……：「みな異言を話す」のを見て、「氣違いだと言」う、と想像している（コリント第一一四：二三）。甘いぶどう酒に酔っていると、氣違いとが見られる行動とは、どちらも余り沈着冷静でも理性的でもなく、一種の熱狂的な陶醉状態あるいは、恍惚状態にあるという意味で同類のものと言える。

ペンテコステの「他国のことば」とコリント教会の「異言」との、以上のような類似点を、私たちは、一体どのように理解するべきであらうか。ルカが「異言」という現象を正しく理解していなかったということなのか。逆に、誤解していたのはパウロなのか。それとも、表面上は類似しているが、やはり異なる、区別すべき現象として理解しなければいけないのか。この問題点に関連して、興味深い事柄は、ルカとパウロとの関係に他ならない。ルカの描くパウロの説教、神学がパウロ書簡のそれと違うことに注目して、ルカはパウロを個人的には、余り、あるいはほとんど知らなかった、と論じられてきている⁷⁴。この関連で、最も問題となってくるのが、「私たち」とルカが一人称複数で記述している箇所の理解に他ならない⁷⁵。批評的な立場の学者たちは、この、ルカの一人称複数を、単なる文体上の問題で、読者に鮮かに描写するためであるとか、この部分はパウロの同伴者の日記、旅行記の類を資料として使ったためである等と説明してきた⁷⁶。しかし、ルカがパウロの旅に同行していたため、と理解するのが、筆者には最も自然な説明と思われる⁷⁷。とすると、多くの懐疑的な見解にも拘わらず、ルカはパウロを個人的に知っており、彼の神学についても、少なくとも多少は知っていたことになる。もし、このような理解が正しいとするならば、一回限りか、否かの区別は十分考えられるが、必要以上に、コリント教会の「異言」と使徒の働きの「異言」とを切り離さなくてよいと思われる。ルカとパウロとの背景の重複や、コリント教会の「異言」と使徒の働きの「異言」との類似点を考慮すると、少なくとも現象としては同じものであると理解してよいと思われる。即ち、コリント教会の「異言」も使徒の働きの「異言」と同様に、言語である、との結論は避けがたい⁷⁸。ただ、ここで言語とは言っても、み使いのことば⁷⁹のような超自然的な言語である可能性は十分に考えられる。もし、超自然的な言語であるならば、言語学的分析も不可能であらう⁸⁰。

以上は、「異言」については、全くの門外漢である筆者が、新約学の学徒という関心で「異言」に釈義的にアプローチを試みた結果である。結論としては、新約聖書の「異言」とは、一般に聖霊によって、言語学習で習得したのではない言語で、神のみわざ等を語ることに言える。ただし、「言語」とは言っても「御使いの言葉」のような超自然的な言語であって、言語学的分析が不可能である場合も考えられる。

様々な視点、様々な見解がある問題に、一つの視点でのみアプローチするには、自ずと大きな限界があることを認めざるを得ない。しかし、全く無益な作業とも言い切れないであろう。様々な方面からの「意見や」批判に期待して「とりあえず、この論文を置きたらう」。

注

- (1) だいたいが「異言」という訳語の起源を、筆者は疑問に感じて知らなかつた。
- (2) コリント第一一四：九は、新改訳では「舌」と訳されているが、口語訳（新共同訳では「異言」と訳されている。英訳聖書の場合に *tongues* が *glossōla* とは異なる意味領域を持つこと、この点の問題は起つた。
- (3) R.A. Harrisville, 'Speaking in Tongues: A Lexicographical Study' in: W.E. Mills (ed) *Speaking in Tongues* (Grand Rapids: Eerdmans, 1986) pp.35—51. Originally in *Catholic Biblical Quarterly* 38 (1976) 35—48.
- (4) W.G. MacDonald, 'Glossolalia in the New Testament' in: W.E. Mills (ed) *Speaking in Tongues* p.127. Originally in *Bulletin of Evangelical Theological Society* 7 (1964) 59.
- (5) W. Bauer / W.F. Arndt / F.W. Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament Second Edition* (Chicago / London: The University of Chicago Press, 1979) p.162.

W. Bauer / K. Aland / B. Aland, *Griechisch-deutsches Wörterbuch 6 Auflage* (Berlin / New York: Walter de Gruyter, 1988) p.323.

- (6) S.D. Currie, 'Speaking in Tongues: Early Evidence Outside the New Testament Bearing on *Γλωσσῶν Ἀκτῆν*' in: W.E. Mills (ed) *Speaking in Tongues* pp.83—106. Originally in *Interpretation* 19 (1965) 274—94.
- (7) *キリスト教の儀式と神学* の予言者など。
- (8) *民数記* 一一：二三—二四、*サムエル記* 第一一九：二〇—二二、二三—二四など。
- (9) *仮えび* G. Theissen *キリスト教の心理学的側面* を扱った *Psychological Aspects of Pauline Theology* (Edinburgh: T&T Clark, 1987) pp.276—91。また L.C. May *文化人類学と研究*、*魔法と類化現象* を扱った *'A Survey of Glossolalia and Related Phenomena in Non-Christian Religions'* in: W.E. Mills (ed) *Speaking in Tongues* pp.53—82. Originally in *American Anthropology* 58 (1956) 75—96.)。
- (10) *仮えび* G. Theissen, *Psychological Aspects* pp.315—20, 332—41; J.P.M. Sweet, 'A Sign for Unbelievers: Paul's Attitude to Glossolalia' in: W.E. Mills (ed) *Speaking in Tongues* pp.141—64, esp. pp.151—54. Originally *New Testament Studies* 13 (1967) 240—57.
- (11) *実* は、もう一箇所「異言」の言及と思われる箇所がある。バルトロ福音書一六：一七であるが、主要な写本に欠落してあり、ほとんど誰もか本来の本文ではなかつたことである (*仮えび* B.M. Metzger (ed), *A Textual Commentary on the Greek New Testament* [London / New York: United Bible Societies, 1971] pp.122—26; K. Aland and B. Aland, *The Text of the New Testament* [Grand Rapids: Eerdmans / Leiden: Brill, 1987] pp.287—8) ので、本稿では全く触れなかつた。
- (12) 使徒の勅諭二章をめぐるのは、その記述の史実性、および「異言」と同一視してよいかの問題があるが、これらの問題については本論で詳しく扱う。結論を先取りしてしまえば、使徒の勅諭二章の記述の史実性を認め、「異言」と理解する必要があると論じる。
- (13) コリント第一一四：一四—一五参照。
- (14) コリント第一一四：一四〇。とならば、コリント第一一四章によると、「異言」と預言との相違は「解を明かし」が必要か否かについてある。何らかの理由でパウロが「弟子たち」の「異言」を理解したならば、預言との区別の意味がなくなつたであろう。
- (15) *例えび* E. Haenchen, *The Acts of the Apostles* (Oxford: Basil Blackwell, 1971) pp.166—75; R. Pesch, *Die Apostelgeschichte*

- I (Zürich / Einsiedeln / Köln : Benziger Verlag / Neukirchen Vluyn : Neukirchener Verlag, 1986) pp.99—102 ; G. Schneider, *Die Apostelgeschichte I* (Freiburg / Basel / Wien : Herder, 1980) pp.242—47.
使徒の働き全体の系統性よびその歴史的なプロローグについて、聖書学の立場から論じられている W.W. Gasque, *A History of the Interpretation of the Acts of the Apostles* (Peabody : Hendrickson, 1989. repr. of *A History of the Criticism of the Acts of the Apostles* [Tübingen : J.C.B. Mohr / Grand Rapids : Eerdmans, 1975] + 'A Fruitful Field : Recent Study of the Acts of the Apostles' *Interpretation* 42 (1988) 117—31) を参照せよ。使徒の働き全体の系統性も論じている C.J. Hemer, *The Book of Acts in the Setting of Hellenistic History* (Tübingen : J.C.B. Mohr / Winona Lake : Eisenbrauns, 1990) を参照せよ。註釋家のコメントを参照せよ。
- (16) 西沢茂 F.W. Beare, 'Speaking with Tongues : A Critical Survey of the New Testament Evidence' in : W.E. Mills (ed), *Speaking in Tongues* pp.114—19. Originally *Journal of Biblical Literature* 83 (1964) 229—46 ; J. Behm, 'γλώσσα, ἐπεόγλωσσος' in : G. Kittel (ed), *Theological Dictionary of the New Testament I* (Grand Rapids : Eerdmans, 1964) p.725 ; O. Betz, 'Zungenrede und süßer Wein' in : idem, *Jesus—Der Herr der Kirche* (Tübingen : J.C.B. Mohr, 1990) pp.62—64 ; K. Stendahl, 'Glossolalia—The New Testament Evidence' in : idem *Paul among Jews and Gentiles* (Philadelphia : Fortress, 1976) pp.116—19.
- (17) K. Stendahl, 'Glossolalia' p.118. 242—247 キリストの復活や「毒味」について認められる批評的な立場の著者は、242—247を参照せよ。
- (18) F.W. Beare, 'Speaking with Tongues' in : W.E. Mills (ed) *Speaking in Tongues* p.109 ; E. Haenchen, *Acts* p.173.
- (19) F.W. Beare, 'Speaking with Tongues' pp.117—18 ; K. Stendahl 'Glossolalia' pp.117—18.
勿論、この学問的議論の背後には、使徒の働き(キリスト福音書)の歴史的信頼性に対する懐疑的な姿勢がある。
- (20) F.W. Beare, 'Speaking with Tongues' pp.117—18.
- (21) Beare, 'Speaking with Tongues' p.117 ; Haenchen, *Acts* p.169 ; Stendahl, 'Glossolalia' p.118.
- (22) F.W. Beare, 'Speaking with Tongues' p.117 ; J. Behm, 'γλώσσα, ἐπεόγλωσσος' p.725 ; Haenchen, *Acts* p.171, p.175.
- (23) J. Behm, 'γλώσσα, ἐπεόγλωσσος' p.725.
- (24) Haenchen, *Acts* p.174 ; Stendahl, 'Glossolalia' p.117.
- (25) モテマ書1 : 17—19。パウロの十字架教員は、二世紀中葉のモサ・ソノ・ソノ・ソノ (「ヤサノ・オノード・ソノ」) 5章) に初めに見られる (Strack / Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch II* [München : C.H. Beck, 1924] p.601)。
- (26) J. Behm, 'γλώσσα, ἐπεόγλωσσος' p.725 ; O. Betz, 'Zungenrede und süßer Wein' pp.62—3 ; Strack / Billerbeck, *Kommentar II* pp.604—6. 2. パロン「特殊法について」II—19, 「十戒について」III—13, 「四六—四七」四六—四七参照。
Beare, 'Speaking with Tongues' pp.114—18 ; Behm, 'γλώσσα, ἐπεόγλωσσος' p.725 ; Betz, 'Zungenrede und süßer Wein' pp.62—64 ; Haenchen, *Acts* pp.174—75 ; Stendahl, 'Glossolalia' pp.118—19.
ルカが、この伝承を知っていたと仮定す。
- (27) 例えは、F.F. Bruce 24, 使徒の働きに注釈書「ペテロの悲劇」律法授けに関連する伝承の両者が言及している (The Book of the Acts revised ed. [Grand Rapids : Eerdmans, 1989] pp.59, 50) が、史実性に疑問を投げかけている。
- (28) 勿論、ルカ : 一—四は、ルカ福音書の序文であり、使徒の働きは別の著述であり、福音書とは異なり、同類の文書は現存していない。しかし、ルカ福音書の記者と同一人物(ほとんどの例外なく、批評的な立場の学者も認める事実)が、同じテオピロのために第一巻を著しているのは、基本的に同じ姿勢、視点であったと考えられる。
- (29) まして、ルカにとって、福音書も使徒の働きも気軽な著述でしかなく、事実が否かに頓着しなかった等とも言えなく。
- (30) 勿論、最初のイースターの出来事の福音書の記述をめぐるのは複雑な問題があることは否定できない。この問題解決の1つの試みとして、J. Wenham, *Easter Enigma* (Exeter : Paternoster, 1984) がある。
- (31) 基本的な事柄として、厳密には、その大出陣の目的は、その後の「その」の「その」である。D.A. Carson, *Exegetical Fallacies* (Grand Rapids : Baker, 1984) p.108 ; W.A. Grudem, 'Scripture's Self-Attestation and the Problem of Formulating a Doctrine of Scripture' in : D.A. Carson and D. Woodbridge (eds), *Scripture and Truth* (Grand Rapids : Zondervan / Leicester : Inter-Varsity, 1983) pp.51—53 参照。
- (32) πνοή (風) が使われている。原語は πνοή であり、νεφέλα (霧) 詞 (風) を連想させる。また、新改訳の「響を渡した」が直訳では「その」であった (ἐπιπνοαεῦν) 。
- (33) 炎の口とを比喩的に「火の舌」と表現されている。そして、四節の「他国の」は、先取りしている。

- (36) 六節には *ρευόμενος* ὁ *τῆς φωνῆς ταύτης* (この音 [声] が起る) とあるが、*φωνή* は音とも声とも解せらる。大括弧内は *τῆ ἰδιᾶ διαλέκτου*「一語は *ταῖς ἡμετέραις γλώσσαις* による表現を用いられてゐるが、内容的に區別する必要はなからむべき」。
- (37) F. F. Bruce *The Book of the Acts* p.56 参照。
- (38) たとふ「*πνευμα*」の字義は「なむる」としても、ガリラヤの人たち(使徒二:七、マタイ福音書二六:七三)が、なまじりなして流暢に「*πνευμα*」のことばを話した」ということかもしれない。
- (39) これを根拠として資料分析をする著者もいる。例へば、E. Haenchen, *Acts* p.171, p.175. Haenchen は、ペテロの説教を導入するため、*ἐρεποι* の反応をコリントに挿入したとする。Haenchen *Acts* p.171.
- (40) 青社社、H.H. Wendt (*Die Apostelgeschichte* [Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1913]) の提唱。最近では、R. Pesch, *Die Apostelgeschichte* I p.104 参照。
- (41) このことばは、バルテヤのユダヤ人たちは、バルテヤの言葉を知る者がなく、との主張にもあてはまる。興味深いことに、千代崎秀雄氏は、パウロがコリント教会での異言現象をよく知らなかったと想像している(「聖霊の賜物と異言」千代崎編『論集——聖霊』[日本オリーブス教団出版局、一九九二年]一三九頁)。
- (42) 一章一節の *λαλόωσαν* … *ταῖς ἡμετέραις γλώσσαις* 参照。
- (43) F. Blass / A. Debrunner / R.W. Funk, *A Greek Grammar of the New Testament* (Chicago: The University of Chicago Press, 1961) p.254; F. Blass / A. Debrunner / F. Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch* 16th ed. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) pp.410—11 §480 3 n.4.
- (44) MacDonald, 'Glossolalia in the NT' in: Mills (ed), *Speaking in Tongues* pp.127—40 の論争の1つ。
- (45) MacDonald は、「聖霊に満たされた」ということが周囲の人々にわかるためには、「異言」のしるしが必要であるとされている。従って、ルカが「聖霊を受ける(に満たされる)」ことに言及している箇所(例へば、使徒八:一七等)では、「異言」のしるしが伴ったと理解している。しかし、そのような理解は不可能ではないが、十分な根拠がないと筆者には思われる。
- (46) このことについては、後でまた触れる。
- (47) 九章では、関連した、パウロの使徒性の弁護がなされている。
- (48) コリント人への手紙第一二:一〇、二八、三〇、一三:一、八、一四:二、四、五、六、一三、一四、一八、一九、二二、二三、二六、二七、三九。二三:一については、口語訳のように、「言葉」と訳すべきであろう。以下で触れる。また、一四:九の *ἡμετεράς γλώσσας* を口語訳・新共同訳では「異言」と訳されているが、新改訳の「舌」の方が適切と思われる。
- (49) この理解に反論を試みる学者がいる(例へば、千代崎氏は、一度は認めつつも、パウロの肯定的発言は「外国語で福音を伝える能力」を意味すると主張している)。「聖霊の賜物と異言」一三六頁、一三八頁。)が、パウロを故意に曲解しようとする限り、パウロが「異言」そのものも否定している、とは結論できない、と筆者には思われる。
- (50) コリント人への手紙第一一四:二七参照。
- (51) *νευματικός* を「御霊の人」と訳すことには疑問を覚える。むしろ、「霊的な人」あるいは、口語訳(新共同訳のように「霊の人」の方がよいと思われる。
- (52) コリント人への手紙第一一四:二六—三三参照。
- (53) 「神の御霊によつて語る者はだれも、『イエスはのろわれよ。』と言わず、…」というパウロの発言は、このような状況を想定しない、と、余り意味があるとは思われない。
- (54) G.D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1987) pp.578—82; G. Theissen, *Psychological* pp. 306—12 参照。
- (55) コリント人への手紙第一一〇—一七参照。
- (56) コリント人への手紙第一一二:四—三三。
- (57) Theissen, *Psychological* pp.271—72.
- (58) ローマ人への手紙二二章の「賜物」の文脈で愛に言及されている(二二:九—一二)。また、ガラテヤ人への手紙では、「御霊の実」として先ず、愛が挙げられている。従って、パウロは愛を「御霊の賜物」の一つと理解していたのかもしれない。
- (59) 興味深いことに、この章でパウロは、*γλώσσα* の単数形を使ったり、複数形を使ったりしている。この場合、両者に大きな意味の違いがあるのだろうか。本稿では、基本的に同義として理解している。
- (60) 先にも触れたが、千代崎氏は、パウロがよく知らなかったと想像している。注(4)参照。

- (60) コリント人への手紙第二 一一二：一〇。
- (61) 「異言」は、語る本人にも「解き明かし」の賜物がないと理解できないらしい。パウロは「異言」を語る者は、自分自身の徳を高めるとは言っていない(コリント第一 一四：四)が、必ずしも、本人は理解できると言うことではない、と思われる。理解できなくても、感情的な高まりや神の臨在を実感している、という意味で「徳を高める」のかも知れない。E.E. Ellis, Pauline Theology (Grand Rapids : Eerdmans / Exeter : Paternoster, 1989) p.115 n.91 参照。
- (62) E.E. Ellis, Pauline Theology p.114 参照。
- (63) 使徒の勅 一一：四 *kai ḡp̄sautro kaleiv étepaus yalōsauts* …… 一〇：四 *h̄kroun yāp autān kalōntōn yalōsauts* … 一九：六 … *ēlālou te yalōsauts kai* …
- (64) コリント人への手紙第一 一四：二二、四 *ō kalōn yalōsōn* … 一四：五 … *kaleiv yalōsauts* … *ō kalōn yalōsauts* … 一四：六 *yalōsauts kalōn* … 一四：一三 *ō kalōn yalōsōn* … 一四：一八 *yalōsauts kalōn* 一四：二二 *kalōn yalōsauts* … 一四：二七 *yalōsōn tēs kalēi* …
- (65) 一八節最後の *kai propheteuōntōn* は、七十人訳にもマンラ本文にも該当する動詞がない。
- (66) 新改訳で、「異なつた舌」と訳されている *ēterōyhalōsōs* は「外国語」あるはず、「外国語を話す」と訳するであろう。(新)共同訳では「異国の言葉」となっている。「異国の人のくちびる」と並行になっていることからも、この意味が明瞭なものと思われる。因みに、イザヤ書のマンラ本文では、ラシヨーン・マンレット、七十人訳では *yalōsōta ētepa* が用いられている。ただし、パウロの引用文は、マンラ本文とも七十人訳本文とも厳密には一致していない。
- (67) 二三節は、接続詞 *ōste* で導入されている。
- (68) 使徒の勅 九：三六参照。
- (69) ヨハネ福音書 一：三八、四二、九：七、ヘブル人への手紙 七：二。
ルカの記述(特に使徒の勅)の史実性と密接に関連している。Haenchen, Acts pp.112—32; Hener, The Book of Acts pp.245—47 参照。
- (70) 詳くは、Hener, The Book of Acts pp.312—34 を参照のこと。箇所は、使徒の勅 一六：一〇—一七、二〇：五—一五、二二：一—一八、二七：一—六、一六。
- (71) Haenchen, Acts, pp.490—91; G. Lüdemann, Early Christianity according to the Traditions in Acts (London : SCM, 1989) p.177; G. Schneider, Die Apostelgeschichte 一 pp.89—95 参照。
- (72) 原は、M. Hengel, Acts and the History of Earliest Christianity (London : SCM, 1979) pp.66—7; I.H. Marshall, The Acts of the Apostles (Grand Rapids : Eerdmans / Leicester : IVP, 1980) pp.263—64; F.F. Bruce, The Book of the Acts pp.307—308。ただし、ルカがコリントに行った理由があるか、あるいは行かなかったか。
- (73) 「異言」と「異言を御解する」の *h̄s*、原は、G. Dautzenberg, 'yalōsōt' in : H. Balz and G. Schneider(eds) Exegetical Dictionary of the New Testament I (Grand Rapids : Eerdmans, 1990) p.253; G. Hörster, 'Zungenrede' in : H. Burkhardt et al (eds) Das Grosse Bibellexikon III (Wuppertal : R. Brockhaus Verlag / Giessen : Brunner Verlag, 1989) p.1732。
- (74) コリント人への手紙第一 一三：一七「人の異言を、御使の異言」と新改訳で訳されているが、「人の言葉や、御使の言葉」と訳し、異言の種類を指す、と理解するのが適切であろう。この関連に興味深いのは、コリント人への手紙第二 一一：四の *ḡp̄p̄nta p̄n̄uata ā oux ēsōu āp̄p̄ōntōn kalōntōn* (新改訳では「人間には語るべきを許されぬこと、口に出すべきの言葉なきこと」) である。
- (75) J.P. Kildahl, 'Psychological Observations' in : Mills (ed) Speaking in Tongues pp.362—64。
- (76) 千代崎論文に対する全体的な反論は、敢えて試みなかった。見解や議論の相違は自明と思われるので、読者の裁量にお委ねした。